

## 東日本大震災をふりかえり想うこと

平成 24 年 1 月 29 日

横沢なお子（甲府地区）

平成 23 年 3 月 11 日、あの日、私は相生にある仮設の市役所の 2 階にいた。午後 3 時少し前に突然の揺れ。が、松代地震（長野）を若い頃に体験して、揺れにはわりと慣れていたので、たいしたことないな・・・と初めは思った。次の揺れで部屋のすみにあった黒板が移動して背後に迫ってきた。とっさに叫んだ。「入口のドアを開けておいて！」初体験の子の顔がひきつっていた。もう一度きたら皆を誘導してこの建物から逃げよう。仮設では危なすぎる・・・と思うまもなく、また揺れた。大きかった。イスに敷いていた座ぶとんを顔にのせて皆で階下へと急いだ。

駐車場のあたりには、それぞれの部署から集まってきた職員や来庁者でゴタゴタとしていた。しばらく下で待機していたが、大丈夫そうなので 2 階にもどった。1 階の総合受付のテレビのニュースで東北が震源地なのだと初めて知った。この前後の館内放送は全くなかったように思う。もし日本語が得意でない外国の方がいたら、私達以上に不安に思ったことだろう。また、聴覚、視覚や車イス等、障害をもっている方にとっても大変な事だったのでは・・・と思った。

「車の運転中に地震がきたら道の端に止める」、「水の確保、懐中電灯も必要だよね」とお互いにつたない知識を確かめあってから帰宅。夫と息子と三人で大急ぎで夕食。大急ぎで入浴。

夜、テレビでニュースを見ていた時だった。「ハロー・・・」となつかしい声。アメリカ在住のジムが心配して電話をくれたのだった。彼は松本の家で 9 ヶ月程ホームステイしていたアメリカの青年で、夫もアメリカ研修の折には（バブルの頃は景気が良かった）、ジムの生家を訪問し泊ったり、三男も英語短期研修の折には世話になったり・・・という訳で、数少ない外国の友人なのだ。彼はかなり興奮していた。まるで日本中がやられてしまったかのような印象だったらしい。後日、原発で大騒ぎになった事を思うと、彼の直感の方が正しかったのかもしれない。

私はすぐに受講生だった E さんに連絡をとり、お互いの無事を確認しあった。彼女も私のことを心配してくれていたのが、とても嬉しかった。

翌日、仙台にいる従姉に連絡したが電話回線が不通。何度もかけてみたが全く通じ

なかった。二、三日して、甲府市内に住んでいる次男から「これから東北へ支援に行く。電話（ケータイ）も通じないと思う。ごめん、詳しいことはまた」と唐突にこれだけ告げると、電話は切れた。仙台にいる母方の従姉、従兄とは小さい頃から遊んだ仲だった。その消息がつかめなかった。時々おこる余震。また、何度も繰り返し放映される現地の生々しい映像の中に、もしや息子がいるのでは？ 二次災害はないのだろうか？ 私に似て小柄な息子である。寒さで震えているのでは等と、いろいろな思いがつのった。彼は公務員であり、事務職とはいえ、こういう時こそ支援に行くのは当たり前なのだが・・・。

わずか1週間で、私は心身共にすっかり疲れはててしまった。18日になってやっと従姉と連絡がとれた。仙台の泉区の高台に位置しているため直接の被害はなかったとのこと。また、日頃から地震に備えて家具の固定、フロの水張り、食料の備蓄などしていたことが幸いした。ただ、電気・水道・電話が止まり、テレビも映らなかったため、2日間、何の情報もなく恐かった。3日目に決心して、隣町まで歩いて行き、公衆電話をさがして、他の兄弟ともやっと連絡がとれた。そこで初めて地震の大きさも津波も知ったとのことだった。

最近、公衆電話の数が極端に減ってしまったが、こうしてみると、いざという時の頼りは、やはり公衆電話なのかなと思う。山梨でも緊急連絡用の公衆電話のマップが必要だ。日本人向けだけでなく、外国人向けのひらがな・カタカナのマップも必要だ。閉局したままのアマチュア無線局も再会局してみようかなとも思っている。

従姉とやっと連絡がとれた18日の夕方、「今、帰ったよ！」と息子からの電話。はりつめていた気持が一気にぬけた。どんな所で、どんな様子だったかは、こわくて聞けなかった。最近になってやっと様子を聞いてみると、気仙沼に行った事、寒くて寒くて凍え死ぬかと思ったこと等、ポツポツと話してくれた。震災直後の支援行はやはり過酷だったのだ。

さて、次男も無事にもどり、従姉達の情報もわかったというのに、体が揺れに敏感に反応し、また、いつも揺れている感じがして、すっきりしなかった。5月も末の朝、起きようとしても眼の前が真っ暗になり、頭を上げる事ができなかった。もはや、これまでか・・・と思った。夫はすでに階下に降りてしまっていた。幸いなことに、雨降りて釣りをやめ隣の部屋にいた三男が救急車を呼んでくれた。緊急性高血圧で血圧が200を越えていたとのこと。翌日、病院やかかりつけの医院でみてもらったが、高血圧症とはいきれないとのことで、その事がよけいに私を不安にさせた。あれから

大晦日まで、私は二階に寝ることができず、また一階で寝ていても、朝の来るのが恐かった。(今は、お陰様で、すっかり元気になったが)

先日、NHK テレビで「人類 20 万年の壮大な旅」を放映していた。人が人として進化してきた過程をたどったものだった。その中で、とても興味深いデータがあった。世界 15 カ所で試したそうであるが、まず 10 ドル札 10 枚（日本円で約 8,000 円）というお金を用意する。そのうちの好きなだけの札を自分でとり、残りを他の人にいくらあげるかをみる実験で、ただし、その様子は誰にもみられないという条件つきで。なかには、全額自分のものにする人、または全部人にあげたという人等、いろいろだったが、同じ条件で何度も実験しているうちに固定した%が出たというものである。アメリカでは自分に 53%、見ず知らずの相手には 47%をあげる。日本では 56 対 44。世界中でも少なくとも 20%は知らない人にでもあげるという結果が出たのだそうだ。無論、完璧な数字とは言い切れないが、とても面白いと思った。

アフリカの地で誕生した私達の祖先は、700 万年前にチンパンジーと枝分かれし、やがて世界中に散らばり、肌の色も体格もその環境に適応して変化し、現存する多種多様な民族になっていった。が、アフリカで生まれた時に培った「わかちあう心」は心の底にずっとみな持っていて、それが、何か起きた時に、芽生えてくるのだという。人間とは元来、協力して生きあう生き物なのだと。つまり、遺伝子がわずか 1%しか違わないチンパンジーとの差は、“自発的”に人を助けることができるかどうかということらしい。

ところで、平成 23 年 11 月 26 日（土）、「山梨日本語ボランティアの会」主催の第 4 回研修会が国際交流センターで開かれた。テーマは「3.11 その時、あなたは？」。第 1 部の台湾、アメリカ、チリの 3 人の外国人によるパネルディスカッションと、第 2 部の参加者全員による交流タイムが主な内容だった。第 1 部のパネルディスカッションを見聞きして感じたこと、それは、「話せること」の重要さだった。緊急時、通訳を通していただけでは逃げ遅れてしまう。また、通訳がいつもそばにいるとは限らない。パネラーや参加していた外国の方々から、ひらがなやカタカナの地図、看板がほしい、インフォメーション（翻訳付き）がほしいとの要望があった。これに加えて、外国の方にも、緊急時に必要な最低限の日本語の会話を身につけてもらうことが必須なのではと思った。無論、私達も各国の簡単な防災時の会話を身につける必要もあるが・・・。「助けあい、分かちあい」の心を持っていても、多くの日本人は外国語を得手していない。大震災ともなれば、日本人自身もある程度のパニック状態になる。

そんな時、言葉の通じない外国人にまでは手がまわらないのではという懸念も出てくるのだ。

さて、研修会で出た貴重な助言のなかで、「食料 2, 3 日分の備蓄、風呂の水の確保、ガソリンはいつも満タンに」等は私もさっそく実践している。ちょうど良い時期での、よい内容の研修会だったと思う。最後の交流会の時間がつまってしまったのは、少々残念だったが。

実は、あの研修会に参加するのには少し勇気が必要だった。内容的に、体調がぶり返してしまうのでは、という不安があった。パネラーの体験を聞いているうちに、少し気分が悪くなってきたが、何とか研修会に参加し終えたことが自信となった。

ところで、あの大地震の時、目の前に津波が押し寄せてくるのもかまわず避難放送を続けて亡くなった 24 歳の女性のことをもとに「天使の声」という詩ができたそうである。息子の支援行や従姉のことで消耗しきってしまっていた自分が何だかとても情けなく恥ずかしくなった。

“4 年以内に 70% の確率で大地震” の予想に驚いていたら、昨日 (28 日) の朝も、今日も震度 4 の地震 (甲府)。のんびりしている場合ではないと感じた。

この間、91 歳の日本語教師の方の投稿が新聞の“声” 欄に載っていた。えッ、90 代で現役!! ガツンときた。私も体力と気力を充実し、語学力をみがいて、少しでも人の役に立てる毎日でありたいと思う。無理をせず、できる範囲で。91 歳の彼女を目標にして。